

## 仕事・研究室詳細

### 四季を通じて自然とふれあう教材としての米づくり。

人間科学



文学部  
人間科学科  
谷口 文章教授

環境教育とは、環境問題を解決するための教育だけではなく、若者たちを自然の中で育てることである。

何が行動しなければならぬ。それが環境教育の始まり

昭和55年5月5日。子供の日。5が4つ並ぶ以外特別な日ではないが、ある一人の教育者は、その日のことを四半世紀経った今も、忘れられずにいる。「その日、残留農薬によって手足に奇形が現れたサルがマスコミで報道されました。そのショッキングな映像は、100年経っても忘れることはできないでしょう。」こう語るのは甲南大学文学部人間科学科の谷口教授だ。「私はそれまで人間学としての哲学、そしてそれだけではカバーしきれない心の問題として、心理学も合わせて研究してきました。しかしその日、奇形ザルの映像を見た瞬間、何が行動しなければならぬ、と思ったのです。それが今やっている環境教育です。臨床心理学においては家庭環境は大切だと思っていたが、奇形ザルによって自然環境の重要性にも気づかされた」と、谷口教授はいう。

米づくりを通じて「自然のリズム」を実感してほしい

谷口教授のゼミでは、体験を通じて自然と生命の尊さを考える野外授業がある。マスコミなどでしばしば紹介される「米づくり」もその一つだ。甲南大学環境教育野外施設の一画を開墾してつくった田んぼで、ゼミ生をはじめ、他学科、さらには他学部からも学生を受け入れて米づくりのすべてのプロセスを体験する。もちろん、無農薬である。「春の田植え、夏の雑草取り、秋の刈り入れ、脱穀、そしてその年の終わり(冬)には自分たちでつくったお米でお餅をついて収穫祭を行います。つまり、米づくりを通じて若い人たちに春・夏・秋・冬の自然のリズムを実感してもらいたいのです。」人間も含め、すべての生命は、季節のリズムで成り立っている。この「自然のリズム」の狂いが心の環境に重大な影響を及ぼし、ひいては環境への配慮を忘れた人間をつくり出すのではないかと、谷口教授は指摘する。

環境と向き合って生きる人間としての節度

米づくりを体験した学生たちは「自然を実感することの大切さに気づいた」「環境についてもっと真剣に考えるようになった」と心の内を明かす。「人間というのは複雑な存在です。机の上で学ばなければならないこともたくさんありますが、その一方でキャンパスを出て自然の中に飛び込み、田植えでもなんでも体を使ってやってみることも必要なのです。野外に出て体を動かすということは、すなわち視点を変えるということ。そして視点を変えていくうちに、物の見方や考え方、環境に対する気持ちにも変化が現れてくるかもしれない。そうすれば、今まで気にもとめていなかったエネルギーの使い方も、無駄なことはやめて、等身大に戻してみようかなと。実はこの気持ちが非常に大事だと思います。」環境と向き合って生きる人間の節度、このことを米づくりを通じて改めて感じさせられるのだ。

環境教育を世界へ

甲南大学では、世界へ環境教育を発信する「国際環境ネットワーク」授業を行う。テレビ会議を利用し、タイ、カナダや環境省等と甲南大学を結ぶe-Learning(遠隔授業)を英語で行い、世界で行われている環境について学ぶもので、谷口教授の環境教育は世界へも飛躍していく。

この画面の情報は、すべて取材した時点でのものになります。